

妻木良三の風景



妻木良三《境界E-II》 2011(平成23)年
和歌山県立近代美術館蔵

熊野古道なかへち美術館(田辺市立美術館分館)では、3月に講師のアーティストと一緒に作品をつくるワークショップ「くまびで作ろう!」の第1回目を開催しました。コロナ禍で何度も中止になり、ようやく開催できた今年度の「くまびで作ろう!」は、和歌山県立近代美術館と協力して計画を進めました。共通のアーティスト、妻木良三さんを、県立近代美術館では昨年夏の展覧会「なつやすみの美術館12 妻木良三 「はじまりの風景」のゲストとして招き、当館では「くまびで作ろう!」①「風景を形づくる」の講師を務めていただきました。

「くまびで作ろう!」では、参加者それぞれが滝やダム、都会のビル群といった思いおぼいの風景を布で形づくって、館内に設置しました。ワークショップでつくられた風景は、美術館の外の風景とも交差して新たな空間を生み出し、それを一週間公開す

ることで、多くの方に観ていただくこともできました。そして、この4月からは熊野古道なかへち美術館で、妻木さんの近年の制作を紹介する特別展「妻木良三 侵食する風景」を開催します。

1974(昭和49)年に和歌山県湯浅町に生まれた妻木さんは、主に鉛筆を用いて、巒(ひだ)が特徴的な山や波、雲といった、世界がはじまるときの風景を思い起こさせる絵画を制作しています。武蔵野美術大学造形学部油絵学科在学中の1998(平成10)年から鉛筆を用いた絵画制作を始め、2001(平成13)年に同大学大学院造形研究科美術専攻油絵コースを修了しました。その後、東京で作家として活動した後、2008(平成20)年に帰郷し、自坊の本勝寺で僧職を務めながら創作を重ねています。

今回の展覧会では絵画作品を展示するだけでなく、妻木さんの絵画の着想のもととなっている布の造形を、インスタレーション作品として初めて公開します。熊野古道なかへち美術館の展示室に合わせて構成される空間は、妻木さんの作品の要となっている、巒の増殖によって侵食してゆく風景のイメージが現れる場となることでしょう。山々に囲まれた熊野古道なかへち美術館の中に生まれる、妻木さんの山のような、あるいは波のような巒の空間を、皆さまとともに体感したく思っています。

(学芸員 知野 季里穂)

INFORMATION

特別展 妻木良三 侵食する風景

会場／熊野古道なかへち美術館
観覧料／400円
学生及び18歳未満の方は無料
会期／2023年4月15日(土)～6月18日(日)
開館時間／午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日

新収蔵作品について

昨年度は、3点の作品を購入し、7点の作品をご寄贈いただきました。また、これまで作家関連資料として保管してきた一群の中から、作品として登録し、管理してゆくことにしたものが17点あります。

購入した作品は、昨年度和歌山県立近代美術館とともに特別展を開催して、その芸術を回顧した日本画家、稗田一穂(1920～2021)の《飄飛》(2009年／156.0×123.0cm／額装 ※下の図版)と、織作家、熊井恭子(1943～)の《風の道》(1987年／230×1000cm／タピスリー ※今号の表紙に図版と作者から寄せていただいた言葉を掲載しています)、《Air》(2018年／650×500×h.280cm／立体)です。

《飄飛》は稗田89歳の作品で、第36回創画展で発表されました。それまでの作品に見られなかった幻想的な光景を描いて、円熟の画技と、尚も新たな表現の境地を開拓しようとする姿勢を存分に示しています。



稗田一穂《飄飛》 2009(平成21)年

《風の道》は、昨年開催した「現代の織VI 熊井恭子」に出品していただいたもので、1987(昭和62)年にスイスのローザンヌで開かれたタピスリービエンナーレでも高く評価された、熊井の制作を代表する作品の一つです。同じく「現代の織VI」の会場で展覧した、《風に吹かれて》(1984年／20×20×d.20cm／立体)、《水の道-T》(1988年頃／216×114cm／タピスリー)、《ドレープ-S》(1989年／200×130cm／タピスリー)、《ドレープ-G》(1989年／200×130cm／タピスリー)、《はじまり-C》(1999年／20×20×d.20cm／立体)、《風に吹かれて-G》(2010年／20×20×d.20cm／立体)の6点はご寄贈いただくことになり、「現代の織VI」と同時に開催した館蔵品展「織の表現」に特別出品していただいた、巨大な金属糸の布を吊るして空間を構成する《Air》を購入しました。

これにより、熊井が金属糸を用いた表現に取り組み始めた初期のものから近年までの特徴的な一連の作品を当館のコレクションとして収蔵することができています。

なお、2017(平成29)年の「現代の織II」で紹介した織作家、久保田繁雄(1947～)の最新作、《縄文の息吹VI》(2022年／107×107×h.240cm／立体)もご寄贈いただき、当館の織作品のコレクションはさらに充実しています。

昨年度登録換を行ったのは、当市中辺路町ゆかりの近代の南画家、渡瀬凌雲(1904～80)の遺品資料としてご遺族からご寄贈いただいていたものの中から選んだ17点です(※下の表)。

昨年度も現代的な織の造形作品を主に、多くの作品を収蔵してコレクションを拡充することができました。これまでの調査、研究や展覧会の開催が実を結んだものですが、それらのことも含めて、皆様から当館の活動にご理解をいただき、ご支援をいただいているからこそのものであることを、改めてかみしめています。ここに心よりの謝意を表します。

(学芸員 三谷 渉)

青木梅岳の周辺と和歌山の風景

紀南地方の出身者で近代に画家として活動した人物の軌跡を確認し、当地の美術の動向と日本の近代美術史との関係を位置づけて紹介する展覧会シリーズ、「近代紀南の画家」の四回目をこの春に開催します。

今回は、1866(慶応2)年に紀州藩領伊勢松坂(現在の三重県松阪市)に生まれ、1947(昭和22)年に海南省で亡くなった画家、青木梅岳(あおき・ばいがく／本名は元吉)を取り上げます。

展覧会は梅岳の画業と影響を辿る四部で構成し、最初の第一部では、梅岳が田辺に居住していた1905(明治38)年頃からの約10年間に遺した作品を紹介し、次の第二部では、梅岳が1914(大正3)年に海南郡内海村(現在の海南省)に移って以後、旺盛な制作を開始した時期の作品を展覧します。後段で触れますが、晩年の梅岳は和歌山の景勝地を描く作品を手掛けることによって自身の表現をさらに充実させており、このことがうかがえる大正後期から昭和期の作品を第三部で特集します。また梅岳は、自身の制作だけでなく門弟の育成にも精力的にあたっており、その門から輩出した画家たちが後の和歌山の画界を彩っています。第四部では、門下の日高昌克(1881～1961)、小野寺梅郎(1889～1963)、稲田米花(1890～1985)、中谷紀山(1899～1967)らの作品や梅岳の家族たちの作品を取り上げ、梅岳一門の活躍を伝えます。

ここに掲載する《南部梅林図》は雪に覆われた南部町の梅林と鹿島を描いています。しかし梅岳は

風景をそのまま写生したのではなく、中国の漢詩に謳われた桃源郷や仙島といった理想郷、そしてそこで自然とともに暮らす人々の姿を、梅林から海を見晴らす風景になぞらえて描いています。

理想郷の姿を現実の風景に見出す梅岳の表現は、開発が進められ、地域の風景が日々変わっていく近代という時代の中で、大きな意味を持っていたものと思われる。

なお梅岳は松坂の出身ですが、先述したように田辺にも約10年間居住しており、この間に当地の博物学者、南方熊楠(1867～1941)の周辺にいた文化人たちと交流をもちました。このことが機縁となり、後に海南に移った梅岳の自邸隣りに居住して療養した南方の長男、熊弥の支援も行っています。同じ田辺市内にある南方熊楠顕彰館では、こうした梅岳と南方との関係を主眼にした特別展を5月7日(日)まで開催しています。この展覧会と本展とは、南方熊楠顕彰館と当館の連携事業として実施します。また和歌山県内でも、有田市郷土資料館、白浜町の南方熊楠記念館で梅岳関連の展覧会を実施し、海南省歴史民俗資料館では常設展に梅岳コーナーが設けられています。是非それらも併せてご覧ください。

(学芸員 糸川 風太)



青木梅岳《南部梅林図》
1941(昭和16)年 個人蔵

昨年度登録換作品(作者はすべて渡瀬凌雲)

No.	作品名	制作年	材質/形状	寸法 (cm)
1	暮	1932(昭和7)年	紙・墨/額装	117.0 × 146.5
2	河口(新宮・熊野川冬の景)	1932(昭和7)年	紙・墨/額装	152.0 × 184.2
3	魚磯(湯浅所見)	1933(昭和8)年	紙・墨/額装	152.5 × 181.0
4	磨崖	1946(昭和21)年	紙・膠彩/額装	177.5 × 151.0
5	秋立つ春日野	1952(昭和27)年	紙・膠彩/額装	152.0 × 178.0
6	寒蕨夕照	1956(昭和31)年	紙・膠彩/額装	149.5 × 77.7
7	残照グランドキャニオン	1962(昭和37)年	紙・膠彩/六曲屏風	145.0 × 366.5
8	那智瀑底 ※下欄の図版	1963(昭和38)年	紙・膠彩/額装	144.2 × 180.0
9	普陀浴池	1969(昭和44)年	紙・膠彩/額装	145.0 × 209.0
10	古都雪雲	1970(昭和45)年	紙・墨/額装	243.5 × 172.5
11	大台ヶ原	1973(昭和48)年	紙・膠彩/額装	173.0 × 243.5
12	フォロ・ロマーノ(羅馬遺跡)	1974(昭和49)年	紙・膠彩/額装	173.7 × 243.8
13	雪原(ミシシッピ源流)	1976(昭和51)年	紙・墨/四曲屏風	172.0 × 240.0
14	楓林朝陽	1977(昭和52)年	紙・膠彩/額装	174.5 × 243.3
15	晨映	1978(昭和53)年	紙・膠彩/額装	172.0 × 243.0
16	吉野熊野山海図巻 其一	1979(昭和54)年	紙・膠彩/卷子装	61.0 × 671.5
17	黄山玉屏峰	1980(昭和55)年	紙・膠彩/額装	173.0 × 242.5

開館25周年を迎える熊野古道なかへち美術館

1998(平成10)年10月10日に旧中辺路町立の文化施設としてオープンした熊野古道なかへち美術館は、今年開館25周年を迎えます。市町村の合併によって2005(平成17)年5月1日から、田辺市立美術館の分館として新たな活動を始めてからも18年の年月が経過しました。

今年度はこの機会に、熊野古道なかへち美術館設立の基点となり、開館当初からゆかりの画家として顕彰してきた野長瀬晩花(1889～1964)と渡瀬凌雲(1904～80)の活動を改めて振り返ること

としました。7月から9月にかけて、凌雲と紀南地方との関係に注目する展覧会を開催し、10月から12月にかけては、一部田辺市立美術館(本館)も会場にして、晩花の表現を、大正期に行動をともにした画家たちの作品とともに紹介する展覧会を開催します。

その後、展示ケース内の照明設備を改修する工事を実施する予定です。より良い展示環境を整えて、26年目を以降も新たな活動の展開を図ってゆきたいと思えます。

(学芸員 三谷 渉)

INFORMATION

開館25周年記念特別展 渡瀬凌雲と紀南

会場／熊野古道なかへち美術館
観覧料／400円
学生及び18歳未満の方は無料
会期／2023年7月8日(土)～9月18日(月・祝)
開館時間／午前10時～午後5時
(入館は午後4時30分まで)
休館日／毎週月曜日(ただし7月17日・9月18日は開館)
7月18日(火)



渡瀬凌雲《那智瀑底》1963(昭和38)年 田辺市立美術館蔵

2023年度

■田辺市立美術館

2023年度												2024		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
展示替のため休館	①小企画展 近代紀南の画家IV 青木梅岳 4/15(土)～6/18(日)	展示替のため休館	②館蔵品展 戦後美術コレクション展 7/8(土)～9/18(月・祝)	展示替のため休館	③特別展 原勝四郎展 10/7(土)～12/3(日)	展示替のため休館	④館蔵品展 近代洋画コレクション展 12/16(土)～ 2024.1/28(日)	展示替のため休館	⑤特別展 木村兼葎堂とその交友 2/10(土)～3/24(日)					

展覧会スケジュール

■熊野古道なかへち美術館

2023年度												2024		
4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月			
展示替のため休館	①特別展 妻木良三 侵食する風景 4/15(土)～6/18(日)	展示替のため休館	②開館25周年記念特別展 渡瀬凌雲と紀南 7/8(土)～9/18(月・祝)	展示替のため休館	③開館25周年記念特別展 野長瀬晩花と 国画創作協会の 画家たち 10/7(土)～12/3(日)	展示替のため休館	改修工事及び 展示替のため休館				■くまびで作ろう!を予定しています。 講師のアーティストと参加者が一緒になって 作品を作るワークショップです。作った 作品は展示して公開します。			